

慈惠大師傳の新資料について

櫛 田 良 洪

慈惠大師良源について從來良質なものは知られていない。なぜ良源大僧正の傳記がこんなに多く傳はらないのか大きな疑問である。今日のような比叡山延暦寺に寺の經營を始めた人は傳教大師最澄でも慈覺大師圓仁でもない筈である。荒廢した諸堂伽藍を復興し、更に整備した人は他に存在していたように思はれる。開創期の最澄や、圓仁の山門はあのような廣い地域にまで擴つていなかったようである。然し現存の「慈惠大僧正傳」ではそれを慥しかめる事が出来ないし、「慈惠大師傳」では後世の編述で信頼性も缺けているし、亦そのような點は一向觸れていない。従つて良源の研究それ自体もあまり進んでいないのが現状である。これは良源を研究する基本的な史料が乏しく、亦叡山研究の史實にも乏しい爲めである。少くとも良源の研究は今日大きな課題で、元三大師の信仰が獨り叡山の元三大師堂だけの問題だけでなく、廣く關東關西に擴がつて天台宗と元三大師とは全く切り離して考えることは出来なからう。今日では良源は叡山の惡僧が武

器を弄んだ張本人のように思はれ、僧兵の起源は良源にありと口を極めて罵られている。これは水戸の「大日本史」が良源をこのようにみているからで、果して良源はそんな惡僧と見てよいか。良源の規式を曲解した結果ではないかと考へて今日まで推論しているが、今回この資料で良源の性格が明らかになつて、水戸學派の見解は正しいものとみる譯にはいかないのである。

今日良源の傳記で尤も信憑性の置けるものは「慈惠大僧正傳」であらう。この書は良源入滅後四十七年目に著されたもので、その撰者は明らかでないが良源の教を受けた弟子達が集まつて撰集した由が述べられているから一應その通りに信じてみたい。即ち長元四年九月十七日に出来上つたもので、讀んでみると中々名文で出来ており、どの程度まで信頼して良いのか疑はれて来る點がある。換言すれば史料としてとかく明瞭を缺く憾みがある。でも今日の良源の史料としては毫も高い位置は失はれないもので、應仁三年夏五月五日の叡山

飯室谷の長壽院南軒で著したと云う「慈惠大師傳」を始め後世の傳記はすべてこの長文の「大僧正傳」をより所としている。而し日本紀略、扶桑略記、日本高僧傳要文抄、叡岳要記等の良源の傳記をみると必ずしも長元の「大僧正傳」の内容にない記事が出て来る者が多い點である。これは恐らく良源の傳記を編纂するに當つて參考になつた史料が他に存在していた事を想定しなければならない。

そこで之の疑を解くために諸書を探し求めたが容易に手に入れられなかつた。而るに年來調査を續けている京都の祕庫の東寺寶菩提院の三密藏の古書整理に當つて從來知られない幾多の古書が見出されている。偶々本年春二百餘箱の第三號卷子本を繙いてみると相當量缺損し、巻首部は破れ失はれその題名すら詳でないが、本巻は相當に虫損が著しく至極汚れていた。本書をよんでみると大體台密系の修法に用いた次第類であつて、恐らく冥道供次第とも名づくべきもので、長い祭文や禮拜文と云う珍らしい内容のものがあつて東密の次第ではなかつた。卷末には建仁三年五月に淨土寺の御所で勝林末葉行雲が抄出した由が誌されている。この寫本は同年六月に惠道がそれを書寫し、圓暹が更にこれに朱點を附け加えた趣が載せてある。するとこの寫本は建仁三年の古寫本らしく、書體も用紙も大體この時代に該當するようである。かかる古寫本の紙背に「慈惠大僧正拾遺傳」と題する一書が記載

せられている。この紙背の筆蹟は本書とは全く異筆で墨色も薄く、書風も新しく、建仁年間の筆蹟とは全く異つていた。どちらかと云えば亂雑で、字も細く紙幅一杯に行間も狭く書き込まれ、處々虫損で讀み難くなっている。本文のように卦を引いて整然と書寫せるような所はなく無卦で、行間も不揃で而も所々書寫洩れを横に書き加えている。従つて一行の字数も不揃で二〇字から二二、三字詰である。兎も角本文の行数を綴り合せてみると全部揃えることが出来たが總行數二三〇行からなり、その他に奥書が八行から成つていた。卷末に「大僧正傳漏落日記」と附け加えられているから書本の題名は何れが正しいのか聊か疑を持つものであるが、恐らく卷末の題名は本書の内容を物語るもので慈惠大僧正本傳の脱漏している部分を其の本傳の日付を追つて書き加えたと云う意味に素直にとつた方がよいと思はれる。即ち巻首に見ゆるのが正しい題名だと思はれる。

さて新出のこの「慈惠大僧正拾遺傳」が從來全く未知の書であるか否かの點である。明匠略傳日本上（群書類聚所收）によると良源の條に慶命の歎徳文一二一字が載せられているが、この文は慈惠大僧正拾遺傳に所收せられたもので慈惠大僧正傳（以下本傳と云ふ）にはない文である。其他本傳になく拾遺傳にある良源の行歴が掲げられている。この明匠略傳は文永十一年六月の奥書がある點からも鎌倉時代の編である。

でもこの著者は拾遺傳を知つて採用したのか詳でない。亦叡岳要記には大僧正傳のみを引用して拾遺傳の名は出て來ないのである。而るに大日本佛教全書所收の阿婆縛抄第四卷（卷第九二）の如意輪の卷の所に「慈恵和尚拾遺傳云」として天元三年の條以下の文が二四一字がそのまま使用せられてゐる。云うまでもなくこの阿婆縛抄は建長四年小河承證が著したものであるから鎌倉時代に拾遺傳が存在していた事實は十分天台の識者に知られていたものであることが知れる。唯同抄の明匠等略傳の中に良源の傳を掲げ乍らこの拾遺傳の内容に向觸れていないのはどういふことか俄かに説明が出來ない。何れにしても拾遺傳は鎌倉時代に其の著が存在してゐながら今日まで其所在が明らかでなかつた事が云へる。

ではこの拾遺傳を繙いてみると卷頭に次のような卷記がある。「先師大僧正平日之事載于傳文、披閱之處、頗有漏落、非彼不知、依省繁也、予悲墮地拾遺而已、長元五年^{壬申}正月資、梵照私記」と云ふ一文がある。これで本書は本傳文に漏落が著しかつたので其の部分を補つたのがこの拾遺傳であると云うことである。私はそこでここに云う本傳文と云う處の本文を調べてみた。長元四年に著された「慈恵大僧正傳」とこの拾遺傳とを對比してみると全く別個なもので、兩者は全く重複した點は一もない。ここに梵照が述べた傳文は「慈恵大僧正傳」を指していた事が考えられる。作者も兩者

異つてゐる點も讀んですぐ明らかで、本傳は簡潔そのもので、拾遺傳は良源の平生の素行とか、私的な面が多く、亦本傳が編年的羅列に走つて無味乾燥であるのに拾遺傳は良源の人柄を中心に年月を明瞭に芳艸たらしめてゐる。従つて本傳では良源の性格、叡山の發展の眞の把握は困難であるのに、拾遺傳はその缺點を十分に補つてゐることは今後の良源・叡山の研究史料には缺くべからざるものである。唯この作者梵照に關する人柄が明らかでない。先師と云つてゐるから良源の教を蒙つた點は認めて良いが、其の著作年代が長元五年正月であると云うから良源滅後尙五十年後にも生存していた事から梵照は相當老齡であつた點も否定出來ない。今後の研究に待つの外はない。更に一步進んで本傳と拾遺傳との關係を調べてみよう。先づ良源の生地問題であるが、本傳の説と拾遺傳とは異なるもので、前者は近江淺井郡の人としてゐるのみで極めて不明瞭であるが、後者には一步進んで同郡の有河字田河附近と明記してゐる。その生家も後者によると明らかに恵まれない漁撈を事とせる家に育つた事を物語つてゐる。これは本傳には明瞭を缺いてゐる。論義の點でも兩者共に若くして秀でた事を述べてゐるが、拾遺傳は早くも十八歳延長七年に叡山論義に有名を馳せた事を掲げ、年少より他と異なる點を述べて、本傳のような上すべりな點は見られない。良源に詩歌の英才がある點を挙げなければならない。本傳に

はこの點は明瞭でなく却つてこの點は觸れていないが、拾遺傳はこれを力説している。好文の才を具えた點から安和二年の尙齒會の詩席に於ける和歌、詩文の應酬に於ける世人の驚嘆の點を述べている點など注目に値するものがある。更に叡山の楞嚴院の問題についても兩者には見解の相違が見出される前者によると楞嚴院に隱居した所以は藤原氏の指示とするが、後者は夢想によるものと定め、而も同院は慈覺大師圓仁入滅後住持の僧がなく之を見て良源慨いて入住を企てたと説いている。また良源は悲母への孝心が厚く、よくその命に従つた事は説かれているが、拾遺傳によると極めて具體的に、六十、七十の賀を盛大に營んで康保二年良源五十四歳の時にも母は尙生存し、八十の賀を大に營み佛教經典を書寫供養し、更に講筵を張つて八十口の僧を屈請し歌詠の結構を設けたばかりか、數字の雜舍を母のために造立し、湖には龍頭鶴首の船などを設けた。彼の母は翌三年九月まで生き永らへていた點まで明らかにされている。亦大きな問題は比叡山の經營であろう。本傳では良源が座主となるや、山内の堂塔一切を再造し、雲の如くの構が日ならずして成つたと誌るされている。こんな漠然たる記述は良源の叡山の營構を理解するのに適當な記事ではない。拾遺傳はこの點は中々詳細である。叡山諸堂再興の糸口は康保三年十月廿八日夜、定心院十禪師増快坊から失火し、五堂、一樓が焼失した事に始まつた。良源

は大に惱み、翌四年先づ法花堂を造り、恒例の不斷念佛を始め、安和元年から講堂の建立にかかつて講堂の用材集めと諸國に寄附勸募となつた。朝廷でも國々から封戸五百畑を其の造作料に下賜されて叡山再造の費用に充てられた。良源は大いに喜んだからその内百畑を講堂、法花堂、常行堂、楞嚴院の造作料に當て、佛供料百畑は朝廷に返進した點まで明らかに記るされている。良源は更に阿闍梨四人を置いて講學を始めたがその中には惟道、最圓、安然などの巨匠が出て遂に天台教學が興起する所以となつた。もとよりこの講堂の造營の業は容易でなく、天祿元年檜皮葺が葺き終えない内に、亦、惣持院が焼けたので、講堂の工事を一時中止して惣持院造營に専念し、寶塔、山門、樓門、假屋と順次造營を續け、更に灌頂堂、眞言堂、四面の廊、舞臺、橋まで立派に完成したと云う。これは惣持院が會て祖師最澄の本懷の地であつたから良源は心血を注いで造營したのである。そこで良源は天祿二年亦講堂の檜皮葺の完成に精進し、兼て丈六の大日と觀音、彌勒とを造立安置した。更に延命院、四王院の造營にも着手し、その工成るや同三年四月大法會を開いて請僧二百餘口、伶人一五〇餘口を以て各種の舞樂を演ぜしめ、當代の文人源博雅、菅原文時が朗詠を吟じ、亦唐舞に奏良助、高麗舞に師多好成を請うて、南北の歌唄が新古兩様それぞれ顯現せしめ過差之に勝るべからざる狀況であつた。この様子を梵照が二

三百言を費して詳細に述べている。蓋し天祿年間前後の五、六年間に驚くべき大工事を完成している。即ち東塔中心の叡山の再建事業は誠に目覺ましいものがあつた。而るに良源は天祿二年頃から西塔の地を中心とする堂構を志して本覺坊を造つた。而して師跡として本覺坊を中心に兩阿闍梨を置いて度者十五名を朝廷より賜つて、そこに常行堂を構えて不斷念佛を始めたその附近に寶塔、寶幢院、西堂、經藏、鐘樓をも造立し、遂に釋迦堂、禮堂が設けられ西塔の地に偉容を出現したのである。而もこの年圓仁の法界坊を再興して雜舍、寶屋、大衆假屋まで造營して圓仁中心の叡山に經營せんとした。而もこの西塔の地を大師門徒の人に限つて留住せしめることに定めたのである。而して東塔西塔の造營がすむやこの

年横川中堂の改造を始めた。先づ等身の不動明王を安じて大法會を營み、諸卿、諸大夫等の參詣者を多く招いで横川中堂の盛觀を呈せしめた。こうして叡山に東西兩塔と横川の三地區を經營したのである。この外天元三年根本中堂に禮堂、廻廊、中門などを新設せんとして土地が狭少な所から南方の地を以て北谷を填め、立派に完成するやここに根本中堂の造營を成し遂げて中堂會、文殊樓會を修している。而も九間四面の食堂と、七間二面の雜舍を設けて、大師供や内論義を行はせている。即ち叡山を根本中堂中心に改めた點も注意すべきである。天元四年には西塔と同じく東塔にも常行堂を營んで

八部堂として念佛を修行せしめた點も注意してよい。この外に前唐院に釋迦堂を作つてゐる點も「本傳」には漏れてゐるものである。其他良源は不斷念佛會を盛にし、舍利會を興し、七寶塔二基を作つて女人結縁を行はしめ、四月七日山上會を定めて南都北嶺の人達を集め叡山興起の活躍は拾遺傳に於てのみ詳細である。良源はこの外に淺井郡の大吉山寺に百日護摩會を修し、同細江濱でも三重閣の景堂を造つて數十字の雜舍を置いて三日間に亘る大會は參列者踵を接する盛況であつた。

良源は更に比叡大明神の信仰が厚かつた。延曆寺の四至である志賀郡の比叡大明神の社殿が同郡の者に荒廢されてゐるのを知つて朝廷に奏上し停止せしめた。殊に地主三聖の御祭事を盛にし唐崎に神殿、鳥居、廻廊、雜舍など四字を作つて、寶輿二基を新調し、富津濱から唐崎の間を供養の人を船にのせ、龍頭鶴首の船を浮べて歌舞音曲を終日奏樂し續けた點が從來どの記事にも傳へてゐない點である。

こんな點よりも後世に大きな意義を持つたものは良源が比叡山をして圓仁の門徒のみを西塔に止住せしめただけでなく、一山の座主職に就くべき者を限定した點である。天元四年に圓珍の門徒餘慶が座主に就くのを憤つて山内の陵替を來たすと稱し朝廷に迫つて宣旨を下し、圓仁門徒のみが今後一山の座主となるべき事を定めて遂に餘慶を改補せしめたので

ある。この一點は慥かに叡山にとつては重要な點でありながら「本傳」には元來見えていない事で大いに注目すべきことである。次に比叡山を靈山より學山へ方向を轉向せしめた點である。「本傳では良源が興福寺の維摩會で南都の大學匠義昭を論破し、法華會で法相の法藏と論争した應和宗論をのせているが、「拾遺傳」には在世中毎年法華八講を修法し、或は義昭を八講々師にして四季講を修した事を掲げている。四季講は春は涅槃經、夏は花嚴經、秋は法華經、冬は大集經を講ぜしめたと云うことで、良源入寂後の今日も恒例として毎年遠忌の月三日に必ず修していると云うから、四季講堂の名が定心坊即ち横川の元三大師堂に附けられているのはこれによるもので、四季講堂の事は極めて古い時代からあつたと云つてよい史料である。

その他種々なる靈驗談が多く逸話と共に載せられているが到底紹介し難いが、梵照は見聞する所を略述したと云つてゐるが、拾遺傳は本傳と併せて讀むべきものである。本傳の編述の方針に眞似て拾遺したもので、末尾に僧正慶命が長元三年九月八日に良源に捧げた嘆徳文を收録している。これは本傳末に寛和三年慈惠と謚號があつた點を述べているのと同じ考え方から附け加えられたものである。所が慈惠は慈惠大師とはいつていない。而るにこの長元三年の慶命の嘆徳文には慈惠大師と立派に述べている點である。慥かに謚號は慈惠で

あつて慈惠大師ではないが、一體何時頃から慈惠大師と大師號を一般に呼稱としたのかと云う問題になると恐らく平安末以後と考えるのが常識である。而るに長元三年の慶命の嘆徳文には立派に故座主大僧正慈惠大師と云う稱號を使用しているのである。慈惠の謚號を賜ると間もなく大師號を以て一般に通稱していた點を特筆大書してよからう。更にこの慶命の嘆徳文中に慈覺大師の再誕説が述べられていることである。本傳には慈覺大師憐愍の徳をのべて、未だ良源はその再誕説には寛和三年の當時には露骨化していなかつたと説かれている。而るに長元三年の頃には立派に慈覺再誕説にまで展開していた事實を認められる貴重な史料である。

最後に現存拾遺傳の最後に次のような奥書を讀みうるのである。

寫本云、文曆元年十二月廿八日寫了

佛眼院藏本、執筆

源仲

元亨三年^{癸亥}八月十三日於^{京中御門}洛陽安養院書寫之、此傳記多年於^{三山洛}雖^尋求之、空送^三年月、或仁傳借^レ之、感悅々々、仍不^レ及^三新帋善惡、且書寫之許也、以後^{□□□□}改^レ之也。沙門明位寫本不^レ詳^三文字、^{□□□□}雖^レ多^レ之、任^レ本寫^レ之、以^レ他本^二可^レ令^二校合^一也

同十四日

と云うから破損と虫損から全部は讀み難いが奥書の要旨は把握出来るのである。鎌倉末にこの本は中々手に入らなかつた

もので、京洛、山門に廣く探し求めた最後に京都安養院で明位が書寫することが出来たと云ふから既に容易に手に入らないもので流布本がなかつた點も明らかである。

附け加へたいことはこの拾遺傳に次いで「金剛界念誦賦が書寫せられていた。これも極めて破損が著しい。十二行は讀めるが、次の二行は破損して全く讀み難い。この書は天台僧正と卷記にあるから良源の述作で三六〇字に編述したものであるが大體三分の一度度しか残っていない。唯この本文に良源の小序が残っており如何に良源が立派な學匠と護法家であつたかが知れる。この小序では良源は若い頃から白月胎藏界、黒月金剛界の兩部曼荼羅に自らの手で花香を供え續けて來たが、老病で自ら修することが出來ず、同伴のものに供ぜしめて來た。而るに永觀元年七月十六日七十二歳の今ではその作法を營める人もなく、身の病で致し方なくただ合掌して日夜のおつとめを缺く事はないが今や壇に向つてただ感涙滂沱と降つて佛天の御加護を仰ぐのみである。今私はその心を賦して同志に示すのみであると云うのがこの念誦賦であると述べている。今日板本の念誦賦との間にやや出入があるが、完本でないので將來を俟つの外はない。其外慈惠大師繪詞傳などが鎌倉時代に存し多くの興味ある史料を残しているが他日に譲ることとする。(昭和四十年文部省自然科學個人研究助成補助による成果の一部)

慈惠大師傳の新資料について (櫛 田)

執筆者紹介(一)

中村 元	(東京大學教授 文博)
荻須 純	(花園大學教授 文博)
田島 柏	(愛知學院大學教授 文博)
伊藤 眞	(佛教大學教授)
水野 弘	(駒澤大學教授 文博)
佐藤 哲	(龍谷大學教授 文博)
櫛田 良	(大正大學教授 文博)
横超 慧	(大谷大學教授 文博)
竹田 暢	(大正大學講師)
宮崎 英	(立正大學教授)
小笠原 宣	(龍谷大學教授 文博)
藤吉 慈	(京都大學人文科學研究所員)
佐々木 徹	(京都女子大學教授)
鎌田 茂	(東京大學講師 文博)
工藤 成	(京都大學助手)
宇野 惇	(種智院大學助教授)
服部 英	(大正大學教授 文博)
關口 眞	(大正大學教授 文博)
谷本 順	(曹洞宗教化研修所員)
角田 春	(雄(寺院住職))

(九〇頁へつづく)